



## 懐しのプラネタリウム

手塚治虫

淀屋橋交叉点の角のビルに石原時計店という立派な店がある。ここは戦前、心齋橋筋にあった老舗で、現在の社長の石原実氏は、ぼくの小

学校のクラスメートだった。彼がぼくを星の世界へいざない、プラネタリウムと結びつけてくれたのである。

石原君は、時計屋の息子らしく根っからのエンジニアで、作文が大の苦手であった。ある時、作文の時間に先生に、「君はいつも機械の組み立てとかの話ばかり書くけれど、たまには別の題材も探して書いてごらん」と注意されて、一晩考えたが遂に何も思い浮かばず、結局、書いたのは「何も思いつかなかったこと」というタイトルの作文だったという逸話がある。

その彼が、ぼくを四つ橋の電気科学館へ誘ったのは、開館して間もない頃であった。建ったばかりのピッカピカのビルが遠くから見えた記憶がある。まだ阪急宝塚線の鈍行が木造箱型の二軸連結で、円タクの横腹にタラップがついていた時代だった。東洋で最初のプラネタリウムという宣伝に心がときめき、なにか巨大な恐竜みたいな怪物を思い浮かべながらは行っていった。

どちらかという石原君は階下の機械陳列室の方がお目当てのようだった。それはそれで実に<sup>たの</sup>楽しい体験であった。今でも忘れないのは凹面鏡のトリック装置で「まぼろしの花」という展示。正面から花が見えるのに、手を伸ばしてもそこに実体がなく<sup>つか</sup>掴めない、という例のものなのだ。

プラネタリウムのホールを囲む廊下の壁には、星団や渦状星雲や、プロミネンスやコロナの写真が並べて飾ってあり、その当時にはそれだけの数の天体写真が一堂にあるというだけで驚異だった。ホールへは行った時の印象は強烈だった。あの鉄垂鈴の奇怪な姿は目に焼きついて、後年漫画の仕事の上でも、しばしばイメージを流用させて貰ったくらいである。今考えると、あのデザインはたしかにライカやコンタックスの新型カメラに通じるかっこよさで、ナチスドイツの光学技術の粋であった。



久し振りにプラネタリウムの姿を見て、思わず抱きしめたくなったという手塚治虫氏



健在のプラネタリウムと今は撤去した展望シルエット

はてっきりプラネタリウムのための曲だと思い込んでいたのである。この曲がかかるだけで<sup>たちま</sup>忽ち神秘的な宇宙空間的な気分<sup>たちま</sup>に酔うのだった。視聴覚イメージの効果はおそろしい。

ホール入口の正面に向って左側にささやかな売店があって、そこに絵はがきやパンフレットと共に一般向けの天文書なども売っていて、ぼくはそこで、原田三夫氏の「子供の天文学」という本を買った。この本こそ、ぼくと同年代のSF作家や絵描きが気違いのように愛読したものなのだ。小松左京、筒井康隆、その他数え切れぬ当時の少年達がこの本の豪華な想像画や最新の天体写真に熱中し、ボーデの法則や、島宇宙やダイヤモンド・リングなどの用語を覚えたのだった。

この売店で、少しあとになって売り出したのは、「プラネタリウム」というお菓子である。やや長めのクッキーに、銀の砂糖粒を散らしてある。それがつまり星空というわけだった。ちょっと工夫をこらした何の変哲もない菓子なのに、ぼくは毎度それを買って帰った。ぼつぼつ甘いものが不足していった時代だったせいであるが、結構旨<sup>うま</sup>かったのである。

プラネタリウムを観たあとは、時折、屋上へ昇った。ドームが半円形に屋上に膨れ上って、それを地球の北半球にしつらえてあった。腕白<sup>わんぱく</sup>たちは、なんとか北極までよじ登ろうと試みた。下の方は傾斜が急で、ぼくにはほとんど登れないしろものだった。南を見ると、大丸デパートの手前に、建って間もないそごうのモダンなビルが聳<sup>そび</sup>えていた。そのほかには、そのあたりにはまだほとんど目ぼしい高層建築がなかったように思う。

だいたいひと月に一回、演題が変わるたびにプラネタリウムへ通った。やがて、装置のしくみがわかってくると、自分でもプラネタリウムをつくれぬものかと、大それた考えにとりつかれた。家の石<sup>いし</sup>罫箱に星座図を見ながら火<sup>ひ</sup>箸でブスブスと穴をあけ、箱の中に裸電球をさしこんで部屋を暗くし、天井へ穴の光をうつしてみた。四角い箱から四角い天井へうつすのだから、プラネタリウムとはほど遠いものである。だが星

日本の泥臭い兵器や車などとは格段の差があった。それからホールの地平線にあたるところに電気科学館の屋上から360度の市内の展望がシルエットになっていた。解説の人はかならず前説にそれを説明するのだった。そして太陽がうつし出され、市内のシルエットに沈んで行くところから実演がはじまるのだった。

その前後に、いつもホールに流れる曲があった。ずっと後になって、それがエルガーの「威風堂々」だと知るまでは、ぼく

はうつった。夜まっくらな中でうつすと、北斗七星やカシオペアやさそり座らしきものが天井や壁にうつし出されたのだ。

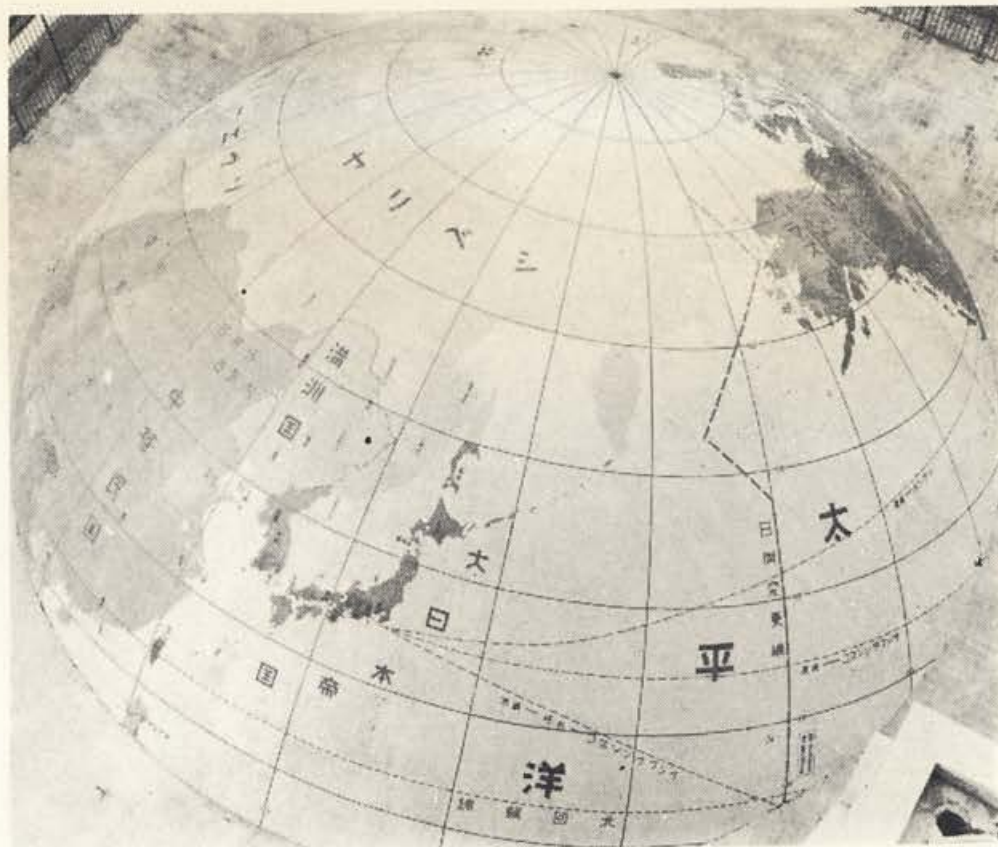
ところがよく見ると、どれも丸い形をしていなかった。ミミズのようにくねくね曲った像なのだ。どうしてこうなるのかすぐにわかった。電球のコイルがらせん状なのだ。だから同じような形に像を結ぶわけだ。穴の一つ一つにレンズをはめこむなどという細工は、とてもできない。それでもなんとか満足して家の者を部屋へひき込んで、解説つきで見せたのだった。

しかし遺憾なことに、ひとしきり解説が終る頃には、弟妹たちは眠りこけてしまうし、おふくろはいらいらと中座して台所へ行ってしまふ始末だった。

戦後、大学生になったぼくは、ふたたびプラネタリウムへ通いはじめた。これは、ホールが一時アメリカ映画の上映をしていたから観に行ったので、正直なところプラネタリウムが目的ではなかった。ドームの一方の壁に映画を映して観せ、それが終わったあとプラネタリウム映写、の二本立てなのである。従って、ついでにプラネタリウムも観てしまう。映画が一週間替わりだから、おなじ演題のプラネタリウムをひと月に何回も観るはめになる。おしまいには居眠りをしてしまうのであった。

先日、仕事のために久し振りに電気科学館を訪れた。ホールの中はさすがに美しくなっていたが装置は昔の儘<sup>まま</sup>だった。懐しくてたまらず、抱きつきたい衝動にかられた。

(てづか・おさむ 漫画家)



ほとんど北極までは登れなかったという屋上の地球儀。今はなきプラネタリウムドームの屋根である。

宇宙のドラマを再現する。

ミノルタの  プラネタリウム  
MINOLTA

プラネタリウム営業部

〒105 東京都港区浜松町2丁目4番1号  
(世界貿易センタービル) ☎(03)435-5551(代)



ミノルタカメラ株式会社

〒541 大阪市東区安土町2丁目30番